
アメフラシ



about/ アメフラシ

2015 年に結成。山形県長井市を拠点に活動するアーティストグループです。2024 年からは、村上滋郎（むらかみ・じろう）、松崎綾子（まつざき･あやこ）、池田將友（いけだ･まさとも）の 3 名をコアメンバーとし、地域の方や仲間と共に活動をしています。拠点は、かつて印刷工場だった「Kosyau」。使われなくなっていた建物を、自分たちの手で少しずつ直しています。完成を目指すというよりも、使いながら直し、直しながら考える。だから Kosyau は、いまも途中のままです。その変化し続ける過程そのものを、活動の一部と考えています。お祭りで使用する草鞋の継承や、ほうきの継承など、日々の営みの延長にあり、区切りのない時間の中で少しずつ形を変えながら続いている、そんな活動です。



村上滋郎（むらかみ・じろう）
アーティスト 1983 生まれ　2006 東北芸術工科大学美術科洋画コース卒業　2008 京都市立芸術大学 大学院美術研究科　油画修了
アメフラシ（2015 ～）　長井ブルワリークラフトマン　代表 / 醸造責任者（2017 ～）　東北芸術工科大学准教授
「東京画 II」（東京都美術館、2013）、TSCA RoughConsensus（ アンテルーム京都、2013）、 トーキョーワンダーウォール 10 周年展 /（東京都現代美術館 / 2010）DICE PROJECT003 / roller coaster island（magical art room / 2008）、「京都の 5 人 / 5 painters from Kyoto」（Taro Nasu /2008）
トーキョーワンダーウォール 2008 大賞　　Art Award Tokyo 2008 審査員賞



松崎綾子（まつざき・あやこ）
画家　1983 年生まれ　2010 東北芸術工科大学　美術科日本画コース卒業　2012 東北芸術工科大学院　日本画領域修了
アメフラシ（2015 ～）東北芸術工科大学　非常勤講師（2016 ～）
第 10 回菅楯彦大賞展（倉吉博物館　倉吉 / 鳥取　2021）　夏目漱石生誕 150 周年「吾輩の猫」展（佐藤美術館　新宿 / 東京 2018）
進芸術家選抜展 FAUSS（アーツ千代田３３３１　千代田 / 東京 2018）木をみて森をおもう（画廊くにまつ　青山 / 東京　2016）



池田將友（いけだ・まさとも）
文筆家　1983 年生まれ　2006 東北芸術工科大学　生産デザイン学科卒業
アメフラシ（2015 ～）　一般財団法人文教の杜ながい　勤務（2014-2020）　家業の飲食店（2020 ～）
2012 ありがとう大賞　宝島ワンダーネット主催）にて特別賞受賞　2013 ありがとう大賞特別賞受賞作「弁当男子」刊行

Biography

Selected Exhibitions

2026　Kosyau の壁をファマに移設する /famAA/ 山形
　　Trash Art Exhibition / 新庄市エコロジーガーデン文化交流施設 / 新庄
2025　六本木クロッシング 2025 展：時間は過ぎ去る わたしたちは永遠 / 森美術館 / 東京
2024　箒から未来を問う　nextnewness/famAA/ 山形
2023　アーティストの冬仕事展 /8BOOKs/ 仙台
2022　「ここに新しい風景を、」東北芸術工科大学 30 周年記念展 / 東北芸術工科大学 THE TOP/ 山形
　　現代山形考　藻が湖伝説 /BOTA シアター / 山形
2020　現代山形考　藻が湖伝説　/ 東北芸術工科大学 THE TOP/ 山形
2018　100 ものがたり　山形ビエンナーレ / 東北芸術工科大学 / 山形

Projects

2016 ー　Kosyau projects
2016 ー　アーティストの冬仕事　草鞋をつくる
2017 ー　アーティストの冬仕事　金井神ほうき
2017 ー　長井ブルワリークラフトマン

Awards & Grants

2021　松坂世紀記念財団　奨励金
2019　長井市　伝統産業継承事業　補助金（2019、2020）
2018　やまがた若者チャレンジ応援事業
2018　長井ビジネスチャレンジコンテスト
2017　公益財団法人福武財団　アートによる地域振興助成「市民参加型旧工場芸術的再開発」
2017　長井まちづくり基金　歴史的建造物保全事業

Organized Programs

2026　kosyau garage shop（2020、2021，2022，2025，2026）/kosyau
2026　印刷について考える　ツタエルコト　ノコスコト / 石版印刷体験 & 吉田勝信　トーク　/kosyau
2026　ツアー＆ワークショップ「草鞋を編むこと」〜ただそれだけです〜山形来訪版 / 森美術館　共同
2026　草鞋継承 ws（2017 から毎年開催）
2019　トークイベント 地方で絵を描く　徳山拓一×桝田倫広×三瀬夏之介　/AYu:M
2018　ASSEMBLIES IN 長井　アートと町をつなぐヒント
2017　Kosyau　ワークショップ　（2017、2018，2019）
2016　kosyau Talk Exhition 志村直愛　津上みゆき

Workshops

2026　「『草鞋を編むこと』ただそれだけです」/ 六本木クロッシング 2025　森美術館
2023　金井神ほうきをつくろう　/8BOOKS/ 仙台
2022　現代茶経　喫茶往来

Talks / Forums

2026　ポストギャザリング IN 大阪「シェアミーティング 3　オルタナティブなネットワークを考える
2026　シェアミーティング 3「地震、雷、火事、親父、病原菌から生まれ出る美術」/ マレーシア・ペナン
2026　「『草鞋を編むこと』ただそれだけです」/ 六本木クロッシング 2025　森美術館
2025　てつがく対話 / リアスアーク美術館

市民参加型旧工場芸術的再開発計画

Kosyau　プロジェクト

2016 年開始

2017 年 WS 開始

助成
2017 年度　福武財団　アートと芸術による地域振興の助成
　　長井まちづくり基金　歴史的建造物保全事業
2018 年度　やまがた若者チャレンジ応援事業
後援企業　株式会社　山市　株式会社　丸八鉄工所

Kosyau Project は、山形県長井市にある旧印刷工場の建物を拠点とした継続的なプロジェクトです。2016 年より、使われなくなった建物を地域の人々とともに少しずつ改修しながら、制作、展示、ワークショップ、トーク、飲食、学びなど、多様な活動が交差する「市民アトリエ」として育てています。

「Kosyau」は山形県の方言で「つくる」という意味です。私たちは建物全体を一つの作品として捉え、終わりを決めずに手を入れ続けています。建物は用途を固定せず、その時々の地域や社会の状況、人々の営みに応じて姿を変え続けます。

改修は、建築士（工藤建築研究所）、大工（tette 工房）、電気設備（nerrows）、美術家（後藤拓朗）だけでなく、地域住民や学生など、多様な人々との協働によって進められています。地元の職人を講師とした実践的なワークショップを通して技術を学び、市内で生まれた廃材や既存の素材を活かしながら、多くの人の手が加わることで建物は少しずつ更新されていきます。

Kosyau は、作品を展示するためだけの場所ではありません。人や技術、地域の記憶が交わり、新たな活動や関係が生まれ続けるための基盤であり、その変化し続ける過程そのものを私たちの表現と考えています。





建築士
工藤建築研究所



大工
tette 工房



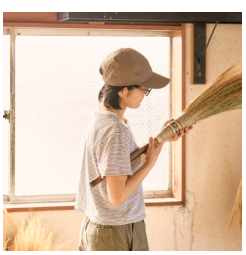
電気設備 / 料理人 / ビール醸造
nerrows



書道家
小池桜里



画家
後藤拓朗



箒職人 / 木工作家
AKI


Kosyau


アトリエ
Kosyau









市民参加型旧工場芸術的再開発計画

Kosyau　プロジェクト

2016 年開始

2017 年 WS 開始

助成

2017 年度　福武財団　アートと芸術による地域振興の助成

長井まちづくり基金　歴史的建造物保全事業

2018 年度　やまがた若者チャレンジ応援事業

後援企業　株式会社　山市　株式会社　丸八鉄工所

















市民参加型旧工場芸術的再開発計画

Kosyau　Work shop

2017 年 大工道具箱づくり









市民参加型旧工場芸術的再開発計画

Kosyau　Work shop

2019 年 イーゼルづくり

2019 年　椅子リメイク







市民参加型旧工場芸術的再開発計画

Kosyau　Work shop

印刷について考える「ツタエルコトノコスコト」

2026 年 石版印刷体験

助成
2025 年度　置賜文化フォーラム助成

講師：結城泰介氏
東北芸術工科大学　准教授　版画工房 TYPS 主宰
Kosyau の床下から見つかった古い名刺の紙や古紙に実際に刷ってみます。

すべてがつながっているようで、どこか地面に足がついていない。
水面をなぞっただけで、深さを知ったような気になっている。
情報を見ているようで、情報に流されている。

アメフラシの拠点「kosyau」は、かつて印刷工場だった場所です。
kosyau 活動 10 年目の節目に、この場所からあらためて印刷を通して、伝えること、残すことについても考えられるような時間をつくりたいと思います。

















市民参加型旧工場芸術的再開発計画

Kosyau　Work shop

印刷について考える「ツタエルコトノコスコト」

トークイベント「素材と行為から考える印刷とは」

助成
2025 年度　置賜文化フォーラム助成

ゲストスピーカー：吉田勝信氏 / 採集者・デザイナー・プリンター

印刷を技術だけではなく〈時間・身体・痕跡を伴う行為として〉考える時間。
自然環境や産業といった生態系から素材を採集し、顔料やインクを制作する実践や「Foraged Colors」などの活動を通して、印刷を素材・プロセス・行為として捉え直す取り組みについてお話しいただきました。











garageshop

2020 年〜

Garage Shop は、2020 年に Kosyau で始まった、片付けから生まれたショップです。
アトリエの片付けの中で出てきた廃材、私物、そして「作品未満」のもの——誰かにとってはゴミで、誰かにとってはお宝かもしれない、そうしたものたちを並べています。フリーマーケットでありながら、一つひとつに小さなストーリーがあり、展示のような空間になります。

値段をつけるのは、作品ではなく、まだ何にもなっていないものです。それでも人の手を経て、誰かのもとに持ち帰られていく。ものが作品になる手前の時間を、来場者と一緒に見ている場だと考えています。
Kosyau が「使いながら手を入れ続ける場所」であるように、Garage Shop もまた、Kosyau の中で片付けと制作が繰り返されるたびに、形を変えながら続いています。








Garage shop
Kosyau
Garage Shop
+Open Studio



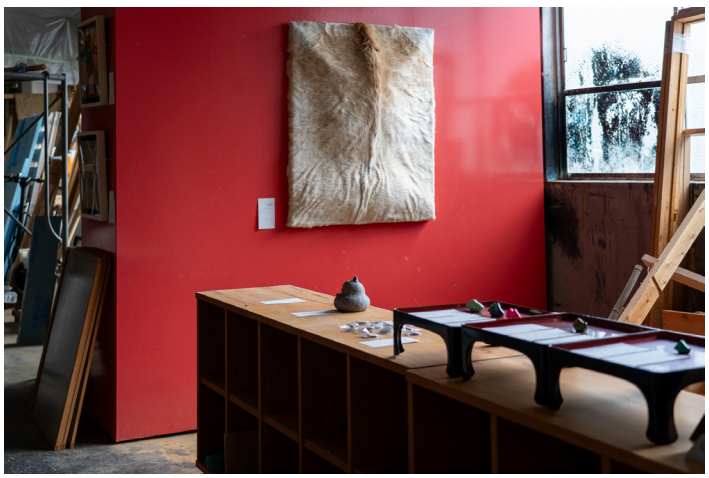












Kosyau　Exhibition

2022 年　絵画、見える世界が変わる

後藤拓朗　松崎綾子　　photo:Kusanagi Yu





















アーティストの冬仕事

雪深い地域では、冬になると人々が家の中で草鞋を編み、箒を結い、翌年の暮らしに必要な道具を手作りしてきました。これは長井市に限った特別な風景ではなく、雪国であれば、かつてはどこにでもあった、ごくあたりまえの営みです。

私たちは、この「冬仕事」という言葉に、もう一つの意味を重ねています。継承する人がいない状態を、私たちは冬と呼んでいます。そして、本気で継承したいと願う人が現れ、その技術が途切れることなく続いていく状態を、春と呼んでいます。

私たちがしているのは、自分たちがその技術の継承者になることではありません。いつか本気で継承したいと願う人にバトンを渡せるよう、技術や工程をアーカイブし、いつでも手渡せる状態を保ち続けること。それ自体を、私たちの冬仕事だと考えています。

私たちは、たまたま山形県長井市でこの活動を始めただけです。同じように、日本のあちこちで、途絶えさせまいとする取り組みが続けられ、残っています。私たちも、その一つとして、しっかり途切れないよう、ただ継続していければと願っています。

アーティストの冬仕事

金井神ほうき継承　2017 年開始







アーティストの冬仕事

金井神ほうき継承　2017 年開始

長井市金井神で作られてきた金井神ほうきの起源は、今から二百年ほど前にさかのぼると伝えられています。米沢の商人が一夜の宿の礼にホウキモロコシの種を届け、翌年その育て方と編み方を教えてくれたのが始まりだったといいます。

かつては柳宗悦の『手仕事の日本』や式場隆三郎の『諸国の民藝』といった、日本各地の暮らしの中の手仕事を記録した書物にも、この地域の仕事として名を残しています。ただし、それは漆器や織物のように「伝統工芸」として特別に扱われてきたものではありません。草鞋と同じように、暮らしの中で当たり前に使われ、当たり前に擦り切れていくもの。金井神ほうきは、そういう位置にある手仕事です。

昭和の時代には、長井市と箒組合が、市内はもとより近隣の市町村までを対象に、公民館での箒作り講座を開き、担い手を育てようとしたことがありました。習って作れるようになった人は大勢いましたが、そのほとんどは趣味として作り、親戚や知り合いに配る程度にとどまりました。正式に組合員となり、家業として継いでいったのは、結局のところ、もともと金井神地区で家業として作っていた家だけでした。作るのにかかる手間に対して、箒の値段はごく安く、それだけを生業として誰かが新たに継いでいくことは、難しい状況でした。

金井神地区で作り続けていた最後の作り手たちは、2010 年代半ばに、相次いで箒作りをやめ、あるいは亡くなりました。私たちが金井神ほうきに関わり始めた 2017 年は、まさにその時期でした。柄の接合部を貝合わせのような形にまとめ、ホウキモロコシの葉柄（ハカマ）を化粧として編み込むという、この土地独自の編み方は、研究者の調査をもってしても、他地域の技術との関係やその由来がはっきりとはわかっていません。

まずは技術を絶やさぬよう、年間 10 本から 20 本ほどの箒を作れるだけの材料を、自分たちの手で育てるところから始めました。2024 年からは、本気で継承したいという方が現れ、この冬仕事のメンバーに加わっていただきました。畑の手入れから、勉強会、実際に編む練習まで、共に取り組んでいます。









山形ビエンナーレ 2018

かないがみほうきのこと

ミクストメディア、金井神ほうき、木製の舟、鉄、絵画

最上川のほとりに位置する長井市は、江戸末期から続く舟運文化の影響を色濃く受け、商人の町として栄えた歴史を持つ。物流の起点でありながら、豊かな水資源と肥沃な大地によって第一次産業も盛んだった。高度経済成長期には企業誘致や製造業、観光業によって一時隆盛を極めたが、日本経済の停滞とともに、その勢いは衰えていった。

舟運は、かつて長井にさまざまな恵みをもたらした。同じように、長井の暮らしを支えてきたもうひとつの技術が、金井神ほうきである。冬、農閑期の家々で編まれてきたこの箒は、担い手を失いつつあった。

私たちは市内に呼びかけ、約 300 本の金井神ほうきを借り受け、インスタレーション作品として再構成した。積み上げるのではなく、山をひっくり返したような逆三角形の形に、天井から吊るす。山形ビエンナーレのテーマ「山のような」に応えながら、あえて山を反転させたのは、この技術が置かれている不安定さを、かたちとして示すためだった。

その下には、山形県最後の船大工の手によって再現された、かつて舟運で使われていた船を設置した。当時個人で所有されていた 80 代の方から、引き取ってほしいという申し出を受け、この船を借り受けている。上の世代が使い、担ってきたものを、下の世代がどう受け止めるか。その問いを、船自体がすでに体現していた。

歴史から失われた舟運の記憶を持つ船に、衰退しつつあった箒を乗せることで、「これはどこへ向かうのか」という問いを鑑賞者に投げかけた。発表当時、正式な継承者は辛うじて健在だったが、この状況が続けば、いずれ途絶えてしまうことが予感された。継承すること自体に意味はあるのか、消えることの方が自然なのではないか——制作の背後には、そうした自問があった。





「かないがみほうきのこと」油性ペン、岩絵具、アクリル、綿布、木製パネル / 2018

アーティストの冬仕事

《Next Newness》金井神樹脂ほうき

2020 から制作

科学技術の発達は、私たちの生活を大きく変えてきた。新しい商品が次々と生まれ、便利さは増していったが、それによって本当に豊かになったのだろうか。その一方で、手仕事や伝統産業は静かに失われつつある。長井市で作られてきた金井神ほうきも、その一つである。

住宅の形式が変わり、掃除機が普及し、箒を使う文化そのものが消えていくのなら、なくなることは自然なことなのかもしれない。それでも、失われるとなると、残さなくてはという引力が働くのもまた、人間社会である。アメフラシは金井神ほうきの技術を教わりながら、それをアーカイブし、いつか本気で継承したいと願う人に手渡せるよう、細々と続けている。同時に、残すべきかどうかを、自分たちに問い直してもいる。

この問いを形にするため、私たちは金井神ほうきに、現代の素材と技術を編み込んだ。穂と胴の部分にだけ天然素材を用い、柄には土に還らない樹脂を使う。ある箒には、編み目に沿って有機 EL を編み込み、闇の中で光る帯として浮かび上がらせた。別の箒には、色をつけた樹脂の柄、背景にメンバーのカリグラフィを配した。文章の内容は、この作品自体が発している問いと同じ、「私たちは本当に豊かになったのか」という自問である。

完成した箒は、額装して展示している。ただし、この額装は封印ではない。もし誰かがこの箒を手に取って使いたいと思うなら、外して使ってもらってかまわない。

ジェフ・クーンズは 1980 年、《The New》というシリーズで、未使用の掃除機をプレキシガラスの箱に密閉し、蛍光灯で照らして展示した。「誕生したままの純粋さを、永遠の処女のように扱いたかった」と本人は語っている。このシリーズの一点には「New Hoover Quik Broom」という、箒を冠した作品も含まれていたが、掃除の道具が時代とともに姿を変え、その名残として箒という言葉が残っていたことは、むしろ当然の変化だと考えている。

1917 年に便器を作品として提示したデュシャンの系譜を引きながら、クーンズが見せたのは、資本主義が最も華やかだった時代の、消費と新品性への礼賛だった。私たちがしていることは、それとは少し違う。大量生産された工業製品ではなく、畑を耕し、種を蒔き、育てた素材から、編んだ箒を額装している。土に還る穂と、土に還らない柄。そして、無意味に光る箒。

技術の進化のかたわらで、静かに失われていく文化がある。その矛盾を前にしたとき、私たちが生きているのは、本当に「進化した時代」と呼べるのだろうか。

進化について問いたい。







《Next Newness》金井神樹脂ほうき / ホウキモロコシ , ポリウレタン樹脂、テグス、有機 EL　/2020

photo: kusanagi yu

アーティストの冬仕事

草鞋の継承

2016 年開始

長井市には、黒獅子まつりという、千年以上続くとされる伝統祭事があります。水神の化身とされる黒い獅子が、五穀豊穣や無病息災を祈りながら集落を練り歩くこの祭りで、複数の担い手が一体の獅子の中に入り込み、龍のように身体をくねらせて舞います。獅子連と呼ばれるその担い手たちは、草鞋を履いて祭りに参加します。

私たちは 2016 年ごろから、市内の草鞋生産者のもとへ草鞋づくりを習いに通い始めました。2017 年、勧進代地区の田畝弘氏と出会ったことで、この関わりは個人的な習い事から、地域の課題と向き合う活動へと変わっていきます。



草鞋文化が置かれている状況は、単純ではありません。冬の仕事としてより効率の良い選択肢が増えたこと、靴やスニーカーの普及で草鞋そのものの需要が減ったこと、農業が機械化されたこと、稲の品種改良によって藁が短くなり草鞋に向かなくなったこと——いくつもの理由が同時に重なり、作り手も、材料となる藁も、少しずつ減っています。生活スタイルの変化を思えば、この文化が消えていくことは、むしろ自然な流れなのかもしれません。それでも、履き続けたいと願う人たちがいる限り、なくすには惜しいとも思うのです。

これまでは、草鞋づくりを一人の農家や、限られた作り手に任せきりにしてきた面がありました。私たちが勧進代地区で提案しているのは、その負担を分け合う仕組みです。祭りで草鞋を履きたい獅子連、その負担を減らしたい農家、獅子連を支えたいと願う寿会（獅子連の OB 会）、そして草鞋を作れるようになりたい私たちアメフラシ。それぞれの動機は少しずつ違いますが、稲藁を育てる段階から協力して関わることで、一人にかかる負担を減らしながら、文化を続けていけるのではないかと考えています。





具体的には、草鞋専用の穂の長い稲を植える田植えから、稲刈り、藁打ち、そして草鞋を編むワークショップまで、一連の工程に私たちも加わっています。2018 年からは、草鞋づくりの歴史的背景や材料の品種、作り方の工程を記録した映像教材の制作にも取り組みました。



この関わりは、少しずつ形を変えています。獅子連の若手からは、自分が履く草鞋は自分で編みたいという声が上がるようになりました。そして今では、勧進代地区の獅子連メンバー自身が、草鞋づくりの講師を務められるまでになっています。2025 年 12 月から森美術館で開催された「六本木クロッシング 2025 展」に出展した際には、会場でのワークショップを勧進代地区の獅子連と共に講師として務め、あわせて森美術館と長井市による現地ツアーも実施し、東京の参加者を実際に長井まで招きました。

金井神ほうきと同じように、私たちがしているのは、自分たちがこの技術の唯一の継承者になることではありません。育てる人、履きたい人、支えたい人、それぞれの立場をつなぎ直し、無理なく続いていく仕組みそのものを、地域の人たちと一緒に組み立てていくこと。それが、私たちにとっての草鞋の継承です。

アーティストの冬仕事

草鞋をつくる

2018 年 39 分

助成：長井心のまちづくり基金　協力：勧進代寿会、田畝弘氏

長井市西根地区勧進代・寿会からの依頼・協力による草鞋づくりの映像教材製作。歴史的背景や藁細工用の藁の品種、作り方の工程などの撮影、編集、図解作成を行う。






神社


獅子頭





アーティストの冬仕事

稲藁をつくる

2019 年 32 分

助成：長井心のまちづくり基金　協力：勧進代地区

草鞋を編むの動画制作中の取材の中で、田畝さんの「編める人はいるけど、稲藁がない」という言葉から制作することになった動画。草鞋に適したこだけ糯というしなりが強い稲藁の作り方の記録。











アーティストの冬仕事

草鞋づくりの WS

2017 年開始　以後毎年数回開催

六本木クロッシング 2025　関連 WS 記録動画　森美術館制作











Cutting out

六本木クロッシング 2025 展：時間は過ぎ去る わたしたちは永遠 / 森美術館 / 東京

撮影：竹久直樹　画像提供：森美術館（東京）

活動拠点にしている、Kosyau（こしゃう）のコンクリート部分２階をスタジオ整備する際に、元々設置されていた木造の構造物を撤去した。私たちはその部材を全て残し、展示什器として使用することにした。移築した構造物に、アメフラシのこれまでの活動にまつわることを展示したり、壁面にカリグラフィーで、テキストを記した。化粧の壁面ベニヤは全て和紙や古紙で修繕した。










Next Newness



Cutting out

「ここに新しい風景を、」東北芸術工科大学 30 周年記念展 / 東北芸術工科大学 THE TOP/ 山形　2022

photo: 根岸功

活動拠点にしている、Kosyau（こしゃう）のコンクリート部分２階をスタジオ整備する際に、元々設置されていた木造の構造物を撤去した。私たちはその部材を全て残し、展示什器として使用することにした。移築した構造物に、アメフラシのこれまでの活動にまつわることを展示した。







長井ブルワリークラフトマン

2017 年設立、2018 年醸造免許取得、2019 年 2 月に商品リリース
アメフラシの村上が代表、醸造責任者のマイクロブルワリー

NAGAI BREWERY
CRAFTSMAN

長井ブルワリークラフトマンがつくるビールは、風景画を描くようなビールです。ひょう干しやくきたち干し、秘伝豆のきなこといった、長井の暮らしに根づいてきた保存食や特産物を、一杯のビールの中に描き出す。飲むことで、その土地の景色や季節の記憶に触れられるような、そんなビールを目指しています。長井ブルワリークラフトマンは、アメフラシの村上滋郎が代表・醸造責任者を務めるクラフトビール事業です。2017 年設立 2018 年、クラウドファンディングで支援を募り、目標額を大きく上回る支援を受けて事業を立ち上げました。

普段つくっているビールは、郷土の食文化をテーマにした、ニッチなラインナップです。ひょう干しやくきたち干し、秘伝豆のきなこといった、長井の暮らしに根づいてきた保存食や特産物を、ビールという形に置き換えています。

この延長線上に、アメフラシと一緒に伝統産業の継承を目指した二つのビールがあります。

一つは、草鞋に使う「こだけ糯」を使ったビール。草鞋づくりには、稲穂が長く伸びる品種が必要ですが、この品種は食用としてはあまり流通していません。1 〜 2 月に開く草鞋ワークショップの日、勧進代地区のみなさんと一年の締めくくりに乾杯するために、このビールをつくりました。

もう一つは、金井神ほうきの材料であるホウキモロコシの実を使ったビールです。ほうきモロコシの実は、次年度の種として残す分以外は使い道がなく、もったいないという理由から、ビールにすることを考えました。

もう一つ、紹介したい活動があります。「Kosyau でビール呑ま Night」です。Kosyau にさまざまな人を招待し、ビールを酌み交わしながら懇親会を開く。地域の人、外から訪れた人、世代も立場も異なる人たちが、ビールを介して顔を合わせ、話をする。継承や制作といった目的を前面に出さない、ただ集まって飲むための場です。

風景を描く

暮らしに根づいてきた保存食や特産物を、一杯のビールの中に描き出す。飲むことで、その土地の景色や季節の記憶に触れられるような、そんなビールを目指しています。












YAMAGATA
NAGAI BREWERY
CRAFTSMAN
CRAFT BR









草鞋づくりの副産物「もち米」を使用したセゾンスタイル



簀の素材 “ ホウキモロコシの実 “ を使用した特別なペールエール

六本木クロッシング 2025 展とのコラボ。出品作家作品ラベル





Kosyau でビール呑ま Night

Kosyauにさまざまな人を招待し、ビールを酌み交わしながら懇親会を開く。地域の人、外から訪れた人、世代も立場も異なる人たちが、ビールを介して顔を合わせ、話をする。













